

第十回がん哲学塾

ニュースレター

発行日：平成 30 年 2 月 8 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

E-mail:juku_0307@yahoo.co.jp

田村祐樹先生をお招きして、第 16 回メディカル・カフェを開催しました。

「ヘレン・アダムス・ケラー」

5 年生 青柿和樹

小学生の頃、「障害は不便です。でも、不幸ではありません。」と伝記の中で語るヘレン・ケラーが信じられなかった。勿論、今でも、もし彼女と同じ境遇に立たされた時、周囲からの賛辞を求めるがゆえではなく、ありのままの自分の口からそんな素敵な言葉が出るとは思えない。しかし、ほんのわずかながら彼女の言葉を理解できた自分がいた。

配られたカードでの勝負に負けは付き物かもしれない。言葉で表現するのはとても難しいが、どうしても超えられない壁は確かに存在する。過去を振り返った時、それは自分が怠ったためではなく、確かにその時々ベストを尽くしていたはずなのになぜかうまくいかないことがよくあった。一部のメディアで取り上げられる成功者達は、「努力は必ず報われます。私がそれを体現しています。」という風に語る。それは勇気を与える言葉であると同時に、傷を負った戦士達をさらに苦しめる言葉でもある。周りを見渡してみても、頑張っって自分の弱い部分と向きあい、戦っって傷を負った戦士ほどこれらの言葉によって崖の下に突き落とされてきたように思える。皮肉にも、成功者の中には謙遜せず、自分の持ち札がどれだけ素晴らしいものかということに気付きもせず、賞賛ほしさに上記を語って称えられている人も見受けられる。「持ち札で必死に頑張っってきた人達は、その想像できないほどの努力は、強いカード 1 枚に破れていく。」と、弱気になった時の私は思っていた。しかし、実際は少し違った。

起こるできごとは不平等だと思う。それは、持ち札が不平等であることから伺える。もし、ヘレン・ケラーが「私は、耳が聞こえず、目が見えない。」で終わっていたら、障害は不幸そのものだっただろう。しかし、持ち札と向き合ってもがき苦しみ、幸運のカード追加(サリヴァンとの出会い)を我がものにし、暗闇の中で水の冷たさを感じて「water」と言葉にした時から、彼女の障害は不幸ではなく、持ち札の 1 枚になったのだと思う。配られたカードに不満を言うのは容易いが、配られたカードの中でどのように今後の人生を歩んでいくかを考えるのが大切なのだと思う。それは他でもなく、“行っは難し”であり、自分の人生である以上、責任を持っって自分で答えを見つけ出すしかないのだと思う。配られたカードに意味付けするのは自分自身であり、たまにもたらされるカード追加(出会いやチャンス)をものにするのも自分しかない。傷を負った戦士たちの健闘は決っして無駄ではなく、むしろ持ち札をフルに使っって戦っった自分自身を称えるべきだ。目の前の出来事(敗北や大きな壁)で配られたカードを恨んで逆走するのも自由、どうやっって持ち札で戦おうかと微笑むのも自由だ。持ち札を駆使して必死にもがき、たとえ負けてしまったとしても、自分自身がその負けを不幸だと思わなければ、また新たな道が開ける気がする。障害を持ち札の 1 つとし、自身のカードで命尽きるまで戦っったヘレン・ケラーのように。

「第 16 回メディカルカフェに参加して」

5 年生 大林裕典

寒さも勢いが増し、神戸の町でも雪が降りしきる中、第 16 回メディカルカフェが地域連携サテライトセンターで行われ、ゼミ生として参加させていただきました。今回はサイモントン療法という心理療法の認定トレーナーである田村祐樹先生が講義をしてくださるということで、参加人数は 47 人といういつもより大規模での会になりました。また玄米、昆布、梅干しというシンプルな具材で作られた「いのちのスープ」が振る舞われました。このスープは食べたことがないはずが、何故か懐かしい味がするスープで深く印象に残りました。

講義ではものの捉え方の大切さを、先生独特のユーモアな話し方で語ってくださいました。最近私も捉え方について考えさせられる機会が多く、辛い体験であってもこれを乗り越れば自分の糧になる、都合が悪い事が起こってもこれが何かにつながるのではないのか、と常に頭で変換しているようにしています。言い換えれば、無理やりポジティブに捉えているだけですが、これを自然に行うことで、自分自身の精神状態、また他人に対する接し方も変わってきました。そのため先生の講義はうなずかされる事が多く、私の考え方はそう間違っていないのかと安心しました。

今回、同じテーブルになり、隣でお話しさせて頂いたがん患者さんは、神戸薬科大学から足が運びやすい地域連携サテライトセンターに開催場所が移ったということで初めて参加された方でした。自分が軽い問いかけをすると、その方は私に自分の経験、治療に関する知識、がんという病気に対する自分の思いと、世間のがんに対する理解度を語ってくださいました。これまで多くのカフェに参加してきましたが、ここまで患者さんの素直な思いというのをお聞きできたのは、初めてのように思いました。今年の 1 月から病院実習が始まり、抗がん剤治療をされている患者さんの病棟に行き接する機会が増えている中、薬や検査値の知識だけでなく、どういう風に接するが一番相手にとって良いのだろうかという疑問に思うことがありました。今回のことでまだはっきりとした結論は出たわけではありませんが、これから病棟薬剤師を目指している私にとって、貴重な経験をさせて頂いたと感じています。

6 回生を目前に控え、これから時間が制限される中、メディカルカフェに参加させて頂くのも僅かだとは思いますが、将来のことを見据えた学びをもっと吸収できるよう取り組んでいきたいと思えます。

「感謝の心を持つ」

5 年生 川口真奈

平成 30 年 1 月 27 日土曜日に第 16 回メディカル・カフェに参加させていただいた。今回の参加者が 46 名と多くの方に参加していただき、学生も 5 年生 3 人以外にも直属の後輩 3 人、アクティブラボの 5 人も参加し、とても盛り上がったメディカル・カフェとなった。

今回の講演では田村祐樹先生による「こころの栄養・いのちの栄養～ほっこりタイム・スープとともに～」が行われた。その講演では参加型で質問に対して手を挙げたり、先生のお話のトークも楽しく、参加者の皆さんも笑顔で溢れていました。

次ページへつづく

特に講演で印象に残った内容が“感謝”の反対語は“当たり前”だという田村先生の考えである。動物の基本行動である「食べる・動く・排泄する」は人間にとって当たり前の行動だが、それができることに“感謝”と思える人が少ないことである。そのお話を聞いて、自分にとって感謝するという気持ちはまだまだ薄っぺらなものだと感じました。常日頃からできていることを当たり前と思わず、「おかげさまで・お互いさまで・ありがたいな〜」という田村先生がおっしゃっていた感謝の心を今後、私自身も持てたらと思いました。

またメディカル・カフェではいつもお菓子と一緒にメッセージカードを置いている。

同じ班の方に「メッセージカードは心がこもっていて、温かさを感じる」とおっしゃってくださった。参加者の方は誰もが何かしらの目的があり参加していらしている方が多い。メッセージカードという温かさをカフェに加えたことは参加者にとっては、安心でき来てよかったと思える感謝に繋がるのだなとメッセージカードで褒められたことで改めて思いました。田村先生特製の“いのちのスープ”も飲み、とてもおいしく、田村先生が朝早くから起きて作ってくださったという過程や思いを知ると尚更体も心も温かさを感じました。人の真心(想い)は伝えたい相手に伝わり、それが感謝に繋がると思えました。

今生きているからこそメディカル・カフェに参加できている。だからメディカル・カフェで様々な参加者と出会え、参加者の想いや温かさを感じることができ、それによる感謝の気持ちをもつことが改めて大切なことであり、勉強になった回でした。

「感謝すること」

4年生 田中葉月

今日のメディカルカフェでは、感謝することや、明るく居られることのすばらしさを実感しました。同じテーブルになったお方のお話は、私自身の気持ちも晴れやかに前向きにしてくださいました。そして今日もメディカルカフェに参加させていただけたことや、希望していた薬学臨床教育センターに配属が決まりこれからメディカルカフェなどに関わらせていただけることへのありがたさが改めて強くわいてきました。食べられることや寝られること動けることだけでなく、いつも周りにいてくれる家族や友達など、日常的だったりして慣れてくるとどうしても当たり前になってしまうことがたくさんありますが、今そのありがたさに改めて気づけたとき、なにか幸せな気持ちになるような気がします。

あともう1つ今日は大切なことを教えていただいたような気がします。私には何ができるのか...今まであまり考えずに生きてきてしまったせいで、最近このことについて考えてみたのですがこれといった答えがわかりませんでした。しかし今は大したことができないしこれから薬剤師の資格を取っても大したことができないかもしれないけれど、今自分の中にある狭い固定概念のようなものを少しでも膨らませられるように学んでいきたいな。という気持ちになりました。そしていつか今日田村先生がお話してくださった、「ありがとう・おかげさま・お互い様」という言葉で私は、“ありがとう”と“おかげさま”という言葉はよく使うことがありますが、なかなか“お互い様”と言えたことがないのでいつか“お互い様”も言えるような人になりたいです。何歳になってもどんな状況にいても感謝しながら過ごせることって、とても素敵だなということを教えていただいた1日でした。

次ページへつづく

「メディカル・カフェに参加して感じたこと」

4年生 森 夕理子

今回初めてメディカル・カフェに参加させていただき、自分の考えやそれを支える思いなどを見つめ直す機会となりました。恥ずかしながら、がんの知識は学校やメディア等で知っている程度で、患者さんの悩みや思いなども間接的に聞いたことがあっても自分がその立場に立って考えて行動をするといったことはほとんどありませんでした。今回このメディカル・カフェに参加する際もあまり勉強できず、直接向き合いながら患者さんのお話を聞き、正直圧倒してしまいました。抗がん剤の副作用で髪の毛が抜けてしまう、痛くてごはんが思うように食べられない、運動が好きでもできない、おしゃれを楽しむことができない、そういった症状や悩みはがん患者さんの多くが経験し世間の注目が得られはじめてきましたが、まだ十分に理解はされていないと思います。患者さんにとってそれぞれ感じ方や考えは違い、生死にかかわる選択が優先されるのがすべてではなく、そういった患者さんの悩みや考えをきちんと汲み取って尊重することが、治療をしていく上で患者さんのところを豊かにする根本になるものだと改めて感じました。そしてまわりの方には表面的な知識だけでなく、がん患者さんの目線からの情報を分かりやすく伝えることが、今後私が医療従事者として働く際に大切にしていかなければならない目標でもあります。何かしらの病気で入院や治療をしていく上で一番影響するものはまわりの環境だと思います。これは治療上だけでなく社会のなかではどんな状況でも言えることであるが、今日の日本ではまわりの環境に自分が合わせる事が多く、それに合わせられない者は外されるという状況が多いと感じます。治療する上でも、自分の病気に関することや考えなどに対してまわりの理解が得られにくい、それによって自分を塞ぎこんでしまう方が少なくないと思います。私自身も持病があり、それに対して悩むことも多々ありました。しかし今こうやって前向きに過ごせるのは、自分のメンタルが強いのではなく、家族はもちろんのこと、学校の先生、友達、病院の方たちに支えられて今の私がいると思います。医療関係の方以外だと病気に対しての知識が少なく、理解しづらいことが多いです。しかし医療従事者がまわりの人に対してのフォローをすることで患者さんの取り巻く環境が良くなり、前向きな方向になりやすいと思います。

今回田村先生にいのちのスープを作っただき、人間の基本行動三つの「食べる、動く、排泄する」を教えてくださいました。スープを飲んでみて先生の愛情が詰まった優しい味がしたと同時に、食を味わい、楽しむことができるのは人間らしく生きている証拠だと感じました。そして今回のメディカル・カフェを通して、自分の将来の目標を改めて見直す貴重な機会でありました。こういった機会を設けていただいた先生方に感謝し、次回から自分の課題を通してたくさんの知識や考えを培っていければと思います。

「メディカルカフェを通して」

4年生 堀部 里帆

私は、今回のメディカルカフェと、午前中に学生同士で議論した話題を通して「聞く」と「聴く」の違いについて考えさせられました。

次ページへつづく

メディカルカフェの前半の田村先生の講演で、意識不明だった患者さんが故郷の料理のにおいで起きたこと、腰が痛くて座れなかった人が大好きなパチンコをするときだけ何時間も座ることができたこと、花火が大好きな患者さんが花火の当日に、今まで意識不明だったにも関わらずぱっちり目を覚ましたことなどの、とても興味深い話をたくさん聞きました。私はこのような、論理的には説明しがたいけれど、人の不思議な力は確実にあると思います。話を聞いてもらうことで気持ちが前向きになって身体も快方に向かうというのも、そのうちの一つなのかなと思いました。

自分の話を聞いてもらうだけで心がすっと軽くなった、ということは誰しもがある経験だと思います。自分のその経験を振り返ってみると、「この人には話しても大丈夫そう」「この人に話してもあんまり聞いてくれなさそうだからやめておこう」と考えて、話す相手を無意識のうちに選んでいたような気がします。将来医療従事者としてできることは、できるだけ患者さんに寄り添い、患者さんの話をきちんと「聴く」こと、この人になら話しても安心だ、という信頼関係を築くことだと改めて思いました。前回も来られていた患者さんが、ある事柄について「調べておいてね、宿題よ」と仰っていたにも関わらず、私たちの中できちんと情報共有ができておらず、その患者さんにきちんと説明することができませんでした。その患者さんは、正しい回答を得ることだけでなく、私たちが真摯に向き合うことを期待されていたのだと思うと、その患者さんの期待に応えられなかったことがすごく悔しくて、また、このようなことは信頼関係に関わると痛感しました。大学の講義でも、共感的態度、傾聴は大切であることは繰り返し何度も言われ、理解していたつもりではいたのですが、今回さらに実感することができたと思います。

まだ二回目の参加ですが、大学での講義と実際の現場とのつながりを感じることができるとこのような貴重な場に参加させていただいていることにとても感謝しています。たくさんの方が、みなさんそれぞれのバックグラウンドを持っていて、そのお話を聞かせていただくことは、まだまだ経験値の浅い私にとって、とても新鮮でとても面白いです。また次回、たくさんの方とお話できることを楽しみにしています。

「メディカルカフェを通じて感じた事」

3年生 杉山あゆ美

今回初めて参加させて頂いて、初めはどういう話をすればいいのかわからなくて戸惑いましたが、先生方が話すきっかけくれたおかげで趣味を中心に話すことが出来ました。そこから徐々に病気の話を聴くことができ、様々なことを学びました。

私のグループでは、がん患者含め全員が明るく、想像していた風景とは全然違って衝撃を受けました。目や表情が生き生きとして、輝いて見えました。その理由は、私が普段いつも通りだと思えることを、大事にしているからだと思います。人と人とのつながりを本当に大切に思っていて、ありがとうの言葉が常に出てきていました。抗がん剤の治療の副作用で辛くても、笑っている方が人がよく喋りかけてくれたりするからその方が楽しいと笑って教えてくれました。

今回のメディカルカフェで強く思ったのは、人は気持ちの持ち方一つで色々なことが変わることが出来るということ。言葉一つで温かい気持ちになったり嫌な気持ちになったりします。だから、私自身色々なことがあると思いますが、人への思いやりと感謝を忘れずに前向きに過ごしていきたいです。

「お互いにプラス」

2年生 細井貴美子

3度目のメディカルカフェの参加となり、今回も生徒側の私が元気をもらい、また、3度目故の新たな気づきがありました。

今回は2人の乳がんの患者さんと同じテーブルでした。1人の方は私がこの夏初めてメディカルカフェに参加した際お隣に座られていた方で、がんが見つかって1年経つ方でした。もう1人の方は初めて来られた方で、乳がんと向き合って7年目になるそうです。その方はとてもお話が大好きそうな方で、またとても気さくそうな方で、常にニコニコしてお話されておりました。

その女性は、この正月に突然旦那さんが病気で他界されたそうで、書類の整理などで追われていると話されました。でもその方は続いて、「急に死ぬのは大変よね！覚悟できないもの！むしろ私は覚悟できる時間があるがんで良かったわ。」と話されました。私はその最後の一言に感動しました。

「がんで良かった。」という考えは私には1つありませんでした。もしこの先自分ががんになったとしても、このように考える事は出来なかったと思います。このプラスな捉え方を聴かせていただいたお陰で、私の考え方もプラス方向に変わりました。そして元気をもらいました。

がんを患い1年経つ方は、私が初めてのメディカルカフェに参加した時はまだ1年経っておらず、1年経っても元気でいられたらとおっしゃっていました。その時の私は何もすることもできず、元気に来てくださいと祈るばかりでした。

そして、今回来られ、偶然にも同じテーブルでした。そしてまた偶然にも同じ乳がんで、7年目であるその方と同席であったため、共通したお話も沢山されており、自然とお互いに会話がはずんでおりました。時にはお二人とも口元を手で覆う程の笑みを浮かべており、横にいた私はその姿を見て、このカフェのおかげで、新たな繋がりがまた1つできたという嬉しさで一杯でした。そして何よりも、1年を無事経過され、更に夏よりも元気な様子を伺えたのが嬉しかったです。

とある日のカフェでの、とある1つのテーブル内での出来事でも、1つでもプラスな事あれば、私達も嬉しくプラスに捉える事ができ、そこから今後の目標や課題が見つかり、それが行く末はカフェ全体を更により良い場にできるのではないかと思います。

何かプラスに繋がるような事や変化が、どんなに小さくわずかな変化だったとしても、相手にお伝えしたり、行動に移すと互いにプラスな結果を生む事を今回経験しました。しかし、時には自分が良かれと思って伝えた事が相手には悪く伝わる事もあると思います。まだ20代になったばかりの私には経験も知識も浅く気づけない点もたくさんあると思うので、そこに気づける大人になりたいと思いました。

「メディカル・カフェの感想」

2年生 伊達 泰生

11月の回に引き続いて2回目で、メディカル・カフェに参加した。

次ページへつづく

まず滋賀医科大学出身の田村先生のお話を聞いて、『いのちのスープ』が生まれた背景を詳しく学んだ。この時に懐かしい“食の風景”を思い出す作業をした。少し考えてはしまったが、思い出してみると幼少期にたくさん見てきた、料理を作る母親の後ろ姿や実家の美味しい料理の数々が頭の中に蘇ってきて、ほのぼのとした気持ちになった。その後に『いのちのスープ』を実際にいただくと、梅干しの酸味がうっすらと効いた玄米のお粥で身も心も温まってホッとするような味わいだった。気分を落ち着けたい時には最適なスープであると感じた。そして、今回も実際のがん患者さんのお話をたくさん聞いた。この時、前回も同じグループだった方がいらっやあって、自分のことを覚えていてくださったことはとても嬉しかったのだが、前回その方にある宿題を与えられていたにも関わらず僕は対処しておらず、内心申し訳ない気持ちが残ってしまった。でもこの出来事をきっかけに、新たな薬学の知識を深めるきっかけを作ることができて良かったと感じている。また、前の田村先生のセミナーの中で、人間に最も必要なこととは①食べること、②動くこと、③排泄すること という3つの項目が挙げられており、自分はこれらのことを普段の日常生活の中で、ありふれたこととして何も意識せずに行っていた。しかしがん患者さんの中には、特に③の項目に対して、出てくれたことに対して快感をおぼえるとおっしゃっていた。僕はこの話を聞いて①～③のような、人間にとって当然であるような行いができるということ＝生きているということというように結びつけられ、自分もこれからの生活の中で起こりうる挫折を乗り越えつつ、生きていることに喜びを感じながら今後の人生を歩んでいこうと思った。

「二度目のメディカルカフェで感じたこと」

2年生 北吉 姫乃

先日メディカルカフェに二回目の参加をさせていただきました。一度目は手順や内容は分からず参加していたので受け身な事が多く参加者の方との会話も話を聞くだけで自分からどう関わればいいのか分からなかったのですが今回は二回目ということで”相手がどう思っているのか・自分から積極的に話に行く”この2つを最低限課題として参加しようと決めていきました。そのことを踏まえて話していこうと思います。

まず初めに”自分から積極的に話していく”についてです。これをこなすにあたり、役割分担にこだわらず周りを良く見て仕事をし一人の方がいらっやれば挨拶だけでもしに声をかけに行くことを常に心がけました。私の仕事はお茶の案内ということでしたが以前の受付の仕事と違って全員の方とお話する機会はありませんでしたが一人一人と長く話すことが出来たので私個人としては受付より人の顔が覚えやすく同じ班以外の方の顔も見ることができ良かったです。以前同じ班の方とも今回は違う班でしたがおかげで話す機会が得られました。その他にも以前は行わなかった一人でいらっやる方に声をかけるということをしてグループとして話を聞くのではなく個人として話を聞けるため病気のことだけではなくどういった思いで参加したのか話すことがメインなのか講義がメインなのかなど個人として話すことによりより深く話が出来たのではないかと思います。

次ページへつづく

次に” 相手がどう思っているのか” です。正直この点については反省点が多くありました、そのことについて順に話していこうと思います。以前と大きく違ったのは症状について同意を求められたことです、私はこの時否定をするか肯定をするかで迷い言葉に詰まってしまいました。私はその部位を見て綺麗に手入れされているのに気づきとっさに肯定も否定もせず「でも、綺麗にされてますね。」と返しましたがその時の顔を見て間違った答えをしたのだと気が付きました、肯定をすべきだったのか否定をすべきだったのか今でも答えは分からずどちらを答えても傷つけてしまうような気がします。そして同時に初めの挨拶で「皆さんと共感し話を聞けたらという思いで参加させていただきます。」と言ったことが大きく間違っている事も分かりました。私はガン患者でもなく患者さんとの対話が慣れている訳ではありませんのでそんな私が共感出来たらなどと何とおこがましい事を言ったのかと後になり気が付きました。今回この二点を重点に置いて参加してみて” 積極的に話に行く” ことについては私なりにいい点を見つけこれから続けていく意味があることだと思いました、ただ話のレポーターが少なく何か一つを突き詰めていくのも素敵かと思いますが薬剤師としては広く浅くでも構わないので多くの人と話ができるようにすべきではないかと考えるようになりました。次に” 相手がどう思っているのか” この点については問題が多くあり先生方には理解しようとする姿勢が大事と教えていただきましたが、まずその姿勢を持ちつつ周りの方の話し方や表情、動きをしっかりとみていいところを盗んでいき最終的には受け答えができるように目指していきたいと感じました。その中で今回尋ねられた質問のベストな答えは何だったのかを考えて見つけていけるように、そして同じことを尋ねられた時に明るい表情をしてもらうことを目標に励んでいきます。

「メディカルカフェを終えて」

2年生 東川 雄司

日本人の約二人に一人はがんを患っている。このことは、割と多くの方が知っている事実かと思われる。ただ、約二人に一人もがんを患っている方がいるのにもかかわらず、その方達にとって優しい社会かと私は聞かれると、そうではないのではないかと答えてしまうだろう。

メディカルカフェにお越しいただいた方々は、もうすでに一つの壁を自力で上りきった方たちであると思う。もし、今私が何か調子が悪いと感じ病院へ行きそれががんだったと発覚した場合、一人で家にこもってしまうだろう。自分とまずその周りに壁を作ってしまうと考える。今まで通りに過ごしていこうと考えるのは到底できない。何かしらの負の感情が生まれるのは必然であると思う。がんが発覚し、一步を踏み出すまでの一つ目の大きな壁はどうしても第三者が関与するのは最後はどうしても本人の判断に関わるので難しいのではないかと考える。なので私が重要だと思うのは、二つ目にある壁なのではないかと考える。この二つ目の壁を仕事関係と仮定し話を進める。どうしてもがんは仕事に影響してしまうものが少なくないという事実がある。今回お越しいただいた方の中にも、仕事を今まで通りに続けていくという方がいらっしやっただが、それでも話を聞くとやはりプロジェクトから外されていたりするという話もしていただいた。もし、私が経営者であれば、確かにプロジェクトを円滑に、また成功を取めたいとなれば健常者を集めるというのは妥当であると思う。ただ、その判断が正解なのかは疑問である。

次ページへつづく

今の時代、二人に一人はがんの可能性がある世の中でその判断基準は間違っているのではないかとさえ考える。それこそ私たち学生が世の中に出て、働くときこそその基準を考え直す必要があると思う。このデータを併用するのはまたおかしなこともかもしれないが、少子高齢化が進み約二人で一人の高齢者を支えていかなければならない現状で、がんを患っているから働けないという世の中では日本は回っていかないと。つまり、この仕事に関する二つ目の壁をどう崩すかというのが私たちがまず関与しやすいことなのではないかと考える。というよりもここをどうにかしないと始まらないと思う。一つ目の壁も、この二つ目の壁があるという事実がわかっているが故に大きくなってしまっているのがあると思う。逆に言えば、この二つ目の壁を崩すことによって一つ目の壁を間接的に崩すことができると思う。そういう社会のシステムを作ることが今後必須になると感じ、ある意味私たちの世代はそういう意味でのターニングポイントになるのではないかと感じる。

私は今勉強に追われる毎日の中で時間だけが過ぎていく。何か固い意志を持って、この一分一秒をかみしめているなあと思ったことは正直一度もない。私みたいな方は少なくないと思う。再度言いますが、今回お越しいただいた方たちは、一つ目の壁を乗り越えた方々です。それに加え、すべきことをはっきりさせた方たちだとも思う。こういうことをいうのは不謹慎かもしれないが、一度私たちはゆっくり自分自身を見つめ直す時間が必要なのではないかと感じがし、何かしらの役目、目標などを見つけ一歩を踏み出した方たちの方がよっぽど私よりも「生きている」という感じがした。そういう方たちから学べることは多い。今回もいろいろなことを考えさせられた。その中で今回は仕事、社会システムについて述べたが、まだあと社会に出るまで四年の猶予があるが、この時期にこのような事実を考えるきっかけを頂いたのはいい経験をさせていただいたと思う。



【樋野興夫先生】

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。

米国フォックスチェイスがんセンター、がん研実験病理部部長等を経て現職。2008年「がん哲学外来」を開設。高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。著書に『いい覚悟で生きる』ほか

顧問：樋野興夫

教頭：沼田千賀子

副塾長：横山郁子

塾生：青柿和樹、大林裕典、川口真奈、

田中葉月、堀部里帆、森夕理子

アクティブラボ：杉山あゆ美、伊達泰生、

細井貴美子、北吉姫乃、東川雄司

次回は
3月3日(土)です

